

チェンバリンを中心とした独占理論(I)

橋 本 介 三

- I 序文
- II 市場構造の分類
 - (1) 独占的要素と市場形態
 - (2) 産業の分類
 - i) 産業概念に反対する人々
 - ii) 交叉弾力性による産業分類
 - iii) 参入(侵入)の条件 (以上本号)
- III 伝統的な価値論
- IV “The Theory of Monopolistic Competition”の中心理論
- V 寡占理論への糸口

I 序 文

1933年、E. H. Chamberlin の “The Theory of Monopolistic Competition” が公刊され、数カ月後に、J. Robinson の “Economics of Imperfect Competition” が相次いで公刊された。この両理論のマイクロエコノミックスに与えた歴史的意義は、R・L・ビショップの言を借りれば、正しく、マイクロエコノミックスに与えたケインズの歴史的意義に匹敵しうるのであった。(Bishop [1] p. 33)

しかしながら、この両理論は一見、密接に類似しているが、反面、非常に相違している点がある。J・ロビンソンの理論はケンブリッジの伝統を受け継ぎ、マーシャルの外部経済をめぐる一連の収益増論争の集約として登場した。そして、負の勾配を持つ個別需要曲線及びそれから誘導された限界収入曲線と平均費用曲線及びそれから誘導された限界費用曲線を分析用具として、不完全市場下における価格決定について、弾力性概念を用いて厳密な論理を適用したのである。⁽¹⁾後に、彼女自身も云っているように、その本はどち

(1) マーシャル批判からJ、ロビンソンの理論が生まれるまでの詳しい説明は(青山 [25] p. 261~294)を参照されたし。

らかといえは tool box としての形式的な (scholastic) 本であった。(J. Robinson [4] p. 579)

他方、チェンバリンの理論は、彼が補論Hで述べているように、その発端と背景を全くJ・ロビンソンとは異にしていた (Chamberlin [6] Appendix H, p. 292~318)。チェンバリンは決してマーシャル批判から出発したのではなく、経済学の原理論、複占の理論の他に、ビジネスエコノミックス (経営学)、及び、特許、商標に関する経済的法律的研究を母体とし、この豊富な現実の観察を背景に、突如として、かの歴史的な “The Theory of Monopolistic Competition” を生み出したのである。

チェンバリンは補論Hの中で次の如く強調している (*ibid.*, p. 307)。

「ここに次の事が銘記されねばならぬ。一般的に、現在の市場分析に、厳密な論理を適用しようとする試みに加えてより一層重要なことは、新しい仮説を示唆するために企業の構造や行動の資料を用い、新しい結論に対して例示的な資料を提供しようという試みである。——要するに、価格の一般理論の中に一般理論家の枠をこれまでに越えてしまったような経済活動のタイプを組み込む試み、これが、重要である。」

この様に、具体的な問題意識から出発したチェンバリン理論の試みは、独占的競争理論の発展に様々な衝撃を与えた。⁽²⁾

特に、チェンバリン理論の意義は、現実の独占的要素と競争的要素の入り乱れた市場の価値理論の究明に、market structure-conduct-performance リンクに基く分析の原理型を提示した点にあった。それが、E・S・メイソンの提案した統計的方法と結びつき、新たな価値論の発展である産業組織論への出発点を用意した。そして、今日に到って、独占問題の的確な認識及びその上に立った performance norm に基づく政策論が展開されるようになってきたのである。チェンバリン理論の決定的な重要性は正しくここにあ

(2) ここでは、チェンバリンの言う独占的要素と競争的要素の入りまじった広義の独占的競争理論をさす。従って、寡占 (oligopoly) をも含む。

た (Bain [24] p. 28~31)。⁽³⁾

以下、この論文の主要なテーマは、チェンバリン理論を産業組織論への礎石として、理論的な意味づけをなすことにある。

従って、Ⅱでまず市場構造の分類をとりあげ、続いてⅢで独占的競争市場の価値論の出発点として、伝統的な価値論をとりあげ、個別均衡とグループ均衡の両側面から均衡点を再検討した。Ⅵで、いわゆる独占的市場〔生産物差別化 (product differentiation) と売手多数〕の均衡問題を中心にチェンバリン理論の核心へ進み、最後に、寡占理論への糸口として、チェンバリンの問題提起をとりあげた。ここで、やっと産業組織論への入口に到達する。

むろん、産業組織論の中心は、この寡占市場の理論的実証的分析であるが、この点に触れるのはこの論文の主要なテーマではない。なぜなら、チェンバリンの思考方法の原型が価値論の彫琢にどのような基本的方向を与えたかを理論的に明確にすることこそ、この論文のテーマであったからである。

Ⅱ 市場構造の分類

E・H・チェンバリンの『独占的競争の理論』があらわれる以前、市場構造は理論上から問題とされてきたにすぎない。すなわち、市場価格は市場需要と市場供給によって決定される。従って、市場供給を構成する商品は、すべて、同質の商品でなければならない。そして、買手が多数で、売手も多数で、かつ、移動性 (mobility) が完全で、情報 (information) が完全である

(3) 今日の産業組織論からはあまりかえりみられなくなったが、当時の (1930年代) 独占問題に衝撃的効果を与えた本の中で、チェンバリン、ロビンソンの他に先駆的業績としてもう一冊をあげるとすれば、Berle & Means, "The Modern Corporation and Private Property", (1932) であろう。

むろん、産業組織論の前史をひもとけば、マーシャル〔9〕にまで溯る伝統的な産業の組織研究や、アメリカの反独占政策の歴史や、1929年から始まった大恐慌の歴史的背景等々をあげることが出来るが、価値論の直接的、方法論的な変革を与えたと言う点で上記の4人は重要であり、とりわけ、結論を先取りするようだが、チェンバリンは産業組織論の父と言っても過言ではあるまい。

ならば、いわゆる完全競争であり、売手が一人の場合は独占であると。完全競争か独占か——この極端な二分法 (dichotomy) が市場構造の一般型をなし、その上に立脚して、詳細な価格理論を展開してきた。しかも、価格システムは、あたかもかくの如きものと根本において仮定してきたのである。⁽¹⁾しかし、この様な理論は確実といてよいほど、現実から遊離している。

チェンバリンは、この様な市場構造の分類の上に立った価格理論に対し、現実の市場の観察から次のように反論をした。

現実の価格システムは、独占的性質と競争的性質の交錯であり、説明すべき現象のどちらか一方を切り捨て、独占か、さもなくば競争かの理論に当てはめようとするのは誤りであり、事実について、誤った結論が生じる。しかも、この二つの力の混合は化学過程であり、単なる加算ではないのである。(Chamberlin [6] p. 3)。

そこで、チェンバリンは、価格理論の出発点として、次の如く主張する。

「価格理論の形成の第一歩は、競争と独占と云う二つの基本的な力を明晰に定義すること、ならびに、それらの力を別々に検討することでなければならない。

さらに、その第二歩は、二つの力の総合でなければならない」(Chamberlin: [6] p. 4.)。

正しく、この着想そのものが、理論の現実化への一步前進を意味した。完

(1) 伝統理論の中には、古典的複占 (duopoly) モデルや双方独占 (bilateral monopoly) モデルの分析が加わるが、それらは大勢を占めたわけではない。この分野に関して、数理経済学上の貢献としてクールノー [11]、エッジワース [12] を代表としてあげることが出来るが、その詳しい解説は青山 [26]、チェンバリン ([6] の Appendix A) を参照されることを希望する。いずれにせよ、これらの理論の特徴は、生産物の同質性と相手反応に関する特殊な仮定の上に立脚していたことにある。この点に関しては、この論文の V でチェンバリンにそって詳しい解説を試みる予定である。

尚、マーシャルは商品の定義に関して、どこからどこまでを同一商品とみなすかは困難な問題であると述べ、ある程度の商品の多様性を認めていた。しかし、近似的には同一の商品とみなし、一本の市場需要曲線と一本の市場供給曲線に表わせるものと考えていた。(Marshall [9] p. 100, p. 546)

完全に競争的な市場から、完全に独占的な市場までの、この両極の中間に、独占的要素と競争的要素のおりなされた様々な中間領域の市場が存在する。その市場形態の分類によって、それぞれ異った価格メカニズムが働く。構造—行動—成果 (structure-conduct-performance) のモデル分析の提唱は、完全競争から独占まで包括しうるマイクロスタティクス (microstatics) の “towards a more general theory of value” への発展を秘めていた⁽²⁾ (Chamberlin [7] の第一論文, p. 3)。同時に、現実の市場形態はほとんどこの中間領域にある故、チェンバリンの目ざしたこの中間領域の理論構成は、独占理論の中心課題であり、従って、又、価値論一般の中心課題でなければならなかった。⁽³⁾

我々は、価格理論の第一歩として、チェンバリンが独占と競争の基本的な力をどの様に認識し、市場構造の分類をどの様になしたかを、まず、みなければならぬ。

(1) 独占的要素と市場形態

独占とは、通常、独占力を持った企業のことをいう。この個別企業に独占力を与える市場の要素を独占的要素という。そして、独占力とは、個別企業の供給コントロールによる価格の支配力と定義する。⁽⁴⁾ (Chamberlin [6] p. 7)。

チェンバリンは、この独占的要素を定義するにあたり、出発点として、純粹競争を考えている。“純粹” (pure) とは、全く、独占的要素を含まない⁽⁵⁾ という意味である。

-
- (2) 事実、チェンバリンのこの本 [6] はアメリカの経済学者が書いた本の中で、最も影響を与えた本であるといわれている。(Baumol [13] pp. 51~52) を参照。
 - (3) チェンバリンは ([6] の P. 5) の脚注で、この中間領域の理論を主張した人々のうち、彼と同時代の人では、スラッファ [14]、ホテルリング [15]、ツォイテン [16] の三人をあげている。
 - (4) この独占力の定義はもっともプリミティブなものであり、チェンバリンはこの見解に従っている。(Chamberlin [6] p. 7)。もう少し一般的に拡張した独占力の定義はケイゼン ([17] S. 688) を参照。
 - (5) チェンバリンが独占的要素を定義するにあたり、その出発点を、何故、完全競争に求めなかったのだろうか。その理由は、摩擦や情報の不確実性はいわゆる市場の不

さて、純粋競争の唯一の前提条件は、企業が価格に対して支配力を持たない場合、いにかえるならば、個別需要曲線が市場価格で水平となる場合である。その様な事態を保証する条件をチェンバリンは次の二点に求める。

(*ibid.*, p. 7)。

第一条件；売手も買手も多数であること。但し、多数であっても、その中の誰かがずばぬけて巨大であったり、結合したりする場合を除く。

第二条件；取引きされる生産物は全く同質的であること。但し、生産物の同質性とは、物質的に同質のみならず、買手からみて同質的であること。従って、売手の個性、評判、立地条件、店の雰囲気等々、買手の選好に影響を及ぼす数量と価格以外のいっさいのものが同質的であること。

以上の二点が純粋競争を規定づける条件があるが、チェンバリンはそれを基として、独占的要素をその逆のケースとして規定した。すなわち、独占的要素の第一は、売手が少数であること。何故なら、個々の売手の販売量は、市場供給の中でかなりの割合を占め、その結果、個別需要曲線は負の勾配を持つからである。⁽⁶⁾ 第二は、個々の売手の生産物がある程度異質である場合。この時、買手は、個々の売手の生産物に対して、ある生産物を他の売手の生産物から差別し、特定の選好を持つ。この場合も第一と同様に、個々の売手は

完全性を構成するが、それらは短期的性格しか持たないと考えていたからであろう。従って、チェンバリンが考えていた長期部分均衡論においては、市場の不完全性による独占力は短期的にしか存続しえず、長期的には消滅し、長期個別需要曲線は水平になると考えていたからだろう。

市場の不完全性に対比して、独占的要素は長期的性格か、又は、累積的再生産可能な性質を持つものと、彼は考えていた。(Chamberlin [7] 第5論文, p. 95~96)。

- (6) この場合は売手が少数で、買手が多数のケースである。チェンバリンの理論は売手競争のみを取り扱っているが、買手競争に関しても同様な議論が出来る。例えば、売手が多数で、買手が少数の場合、個別供給曲線は市場価格で水平でなくなる。生産物が同質的であるにもかかわらず、市場が不完全故、買手が右上りの個別供給曲線を持つ場合を、J.ロビンソンは“Monopsony”と名づけた。但し“Monopsony”の部分で分析しているのは、買手が一人の場合である。例として、労働市場等が考えられる。一般に、要素市場にこのモデルが該当するケースが、若干ある。J, ロビンソン ([3] の Book VI, Monopsony) を参照。尚、買手市場の分類につい

負の勾配を持つ個別需要曲線を持つ。(ibid., p. 8~9)。

この独占的要素の規定により、彼が明らかにした非常に重要な命題の第一点は、二つの独占的要素のうち、少なくとも、どれか一つが存在するならば、個々の売手は負の勾配を持つ個別需要曲線に対応するというのである。逆に、負の勾配を持つ個別需要曲線に、利潤極大化をめざす企業が直面すれば、企業は生産物の供給量をコントロールし、価格に対する支配力を持つ。さらに、より多くの数量を販売し、利潤を獲得するために、販売費が企業の政策の変数として入り、その上、生産物が差別化されているならば、どのような生産物を生産するかという生産物そのものが変数として企業の政策の中に入ってくる。要するに、独占的競争の価値論の解明の出発点を、負の勾配を持つ個別需要曲線と、(平均)費用曲線においた事である。

第二点は、独占的要素を構成する売手数と生産物の差別化(分化)(product differentiation)の様々の組合せによって、基本的に次の五つの市場を区別した点である。⁽⁷⁾

ては個別供給曲線が水平になるか右上りになるかで、売手市場と全く双対して定義できる。

- (7) 不幸なことに、市場の競争形態の名称が非常にたくさんあり、それらは時に重なり合いながらも、若干、ニュアンスを異にする。例えば、チェンバリンが“pure competition”と“perfect competition”を明確に区別したにもかかわらず、両概念が混同されたり、或いは、“monopolistic competition”が次頁の分類の(1)(b)の「独占的競争」の意味にも、又、チェンバリン自身が強調しているような“non-pure-competition”の総称にも使用される。又、“monopolistic competition”が J. ロビンソンの“imperfect competition”と同義に解されるかと思うと“imperfect”という形容詞が生産物の“heterogeneous”の意味に使用されたりする。これに関して、F. マッハループ ([18] の chap. 4, 11.) は売手競争市場の様々な概念を検討し、上記の5つに関しては、統一して次の様な命名を提案している。

- 1)の(a) 完全多占 (perfect polypoly)
- (b) 不完全多占 (imperfect polypoly)
- 2)の(a) 完全寡占 (perfect oligopoly)
- (b) 不完全寡占 (imperfect oligopoly)
- 3) 独占 (monopoly)

私は彼の案には賛成だが、“perfect”、“imperfect”という概念は誤解を招き易いので、一応、J. S. ペインの命名に従った。尚、チェンバリン自身は市場の命名を行っていない。

1) 売手多数の市場

- (a) 生産物同質——純粹競争 (pure competition)
- (b) 生産物異質——独占的競争 (monopolistic competition)

2) 売手少数の市場

- (a) 生産物同質——純粹寡占 (pure oligopoly)
- (b) 生産物異質——異質寡占 (heterogeneous oligopoly)

3) 売手一人の市場

生産物の密接な
代替財がない——純粹独占 (pure monopoly)

むろん、チェンバリンの“独占的競争の理論”が、価値論に与えた理論的な貢献は、独占的競争市場、及び、寡占市場の価格メカニズムの解明であった。しかしながら、チェンバリンの価値論に進む前に、市場構造の分類で、我々が問題としなければならない点がある。

第一点は、生産物が差別化されている産業（市場）の均衡を問題とする場合、その産業をどの範囲で区分するのか？

第二点は、売手が少数というタームが使用されているが、少数とは、3名を示すのか、10名を示すのか、100名を示すのか？

第三点は、一企業が複数の生産物を生産している場合、産業分類をいかになし、又、そのように分割することがいかなる意味を持っているのか？

むろん、これらの問題は、密接に産業概念と結びつけて設定されなければ意味がない。チェンバリンは、生産物の差別化を独占的要素と強調しながらも、現実には、密接な代替として競争しあっている商品のグループ問題を取り扱うことによって、現実と理論の統一をめざしたが、明らかに、産業を“groups of close-but-imperfect substitutes of products”と云う概念に置き換え、産業の均衡の問題を、“the group problem”と置き換えた⁽⁸⁾。なるほど、

(8) チェンバリンは、注意深く、問題の多い「産業」と言う概念をさけて、“group” or “a number of producers whose goods are fairly close-substitutes”と言うタームを使っている。(Chamberlin [6] p. 81.)

差別化された市場において、厳密に生産物の同質性を強調することによって、産業概念そのものを捨て去ると、部分均衡論そのものの有効性まで否定することになる。我々は、この点に関するチェンバリン批判と、上記三点の問題点をふまえた産業の分類の問題を再検討しなければならない。さらに、最近、寡占が一国の経済の主要な部分を占め、しかも、その量的拡大と多様性を増すにつれ、寡占の分類基準そのものの再検討についてもふれなければならない。

(2) 産業の分類

i) 産業概念に反対する人々

広範な生産物の差別化が一般的である現実の経済に対して、産業と云う概念が、どれほど価格メカニズムの解明に関して有効な概念でありうるのか。果して、チェンバリンがひかえめに主張した "groups" of close-but-imperfect substitutes of products と云う概念が、そもそも成立するかどうかの問題となる。この概念を否定する観点は二つある。第一の考え方は、マーシャル以来の伝統を受け継ぎ、たとえ若干の生産物の差別化が存在しても、近似的には同質の生産物とみなし、理論的には全く同質として取り扱うという理論的な立場からの主張である。この様な立場に立って独占理論を展開したのは、J・ロビンソンの〔4〕であつた。⁽⁹⁾しかしながら、このような観点をとれば、独占的要素としての生産物の差別化そのものを否定し、非価格競争の側面をおろそかにし、とりわけ、生産物そのものを変数と考え、どの様な生

(9) J, ロビンソンは、理論上から、一次接近として仮定よりはずしたといった方が正確である。しかし、Chicago School の人々、とりわけ、M・フリードマンは、はっきりとこの立場を主張し、チェンバリン理論そのものを否定し、^{*}完全競争が独占、という伝統理論に固執する。彼は、この "close-substitutes" と "substantial gaps in cross-elasticities" という概念をとりあげ、正確でなければならない抽象的モデルに、あいまいさと、不正確なタームを持ち込んだと批判しているが、全くナンセンスな批判ではあるまいか？ なぜなら、現実の抽象過程で、現実の競争の本質的であつ重要な側面である非価格競争を少なくとも排除するならば、その様な抽象過程そのものに意味がないからだ。(M. Friedman [19] p.66.)

産物を選ぶかという独占的経済の重要な企業行動を否定することになる。逆に、生産物が差別化されている経済において、この差別化の事実を厳格に解釈し、全く相異なる生産物と規定し、この理論に適用しようとするれば、一企業＝一産業となり、グループ均衡そのものを否定することになる。それでは、競争と独占の混合としての理論構成が否定されることになるだろう。

つまるところ、チェンバリンの重要な貢献の一つは、生産物の差別化を積極的に価値論に取り入れ、密接ではあるが不完全な代替財のグループ内の競争を説明することによって、価格、生産物の質、販売費を変数に含む総合的な競争を理論的に明らかにしようとした点にあり、そこにこそ、その特質がある。少なくとも、生産物の質及び販売費を変数に含む非価格競争の解明に出发点を与えたことは注目すべきことではないだろうか。

第二の考え方は、生産物の分化が一般的となれば、産業概念は必然的にあいまいとなり、しかも、ある特定の生産物は、代替、補完関係によって、無数の他の財と関連している故、独占理論としては、このあいまいな産業概念をすて、部分均衡論を捨て、チェンバリン・ロビンソンの個別均衡の概念を一般均衡体系に直結し、体系の均衡を考えようとする立場である。このような産業（グループ）概念に対する反論は1940年、R・トリフィン〔20〕によってなされた。確かに、独占的市場に立脚した一般均衡論は、今日の独占理論の中で、重要な課題の一つであるが、J・R・ヒックスは、「独占の仮定を一般的に採用すれば、経済理論に全く破壊的な結果をもたらす」と主張し、その有効性に対し、分析的観点より否定的見解を出した(Hicks,〔21〕 p. 83)。この点に検討を加えるのは、この論文のテーマから逸脱する。しかし、ここで大切な事は、ある生産物のグループ内の各々の生産物間の交叉弾

(10) 交叉弾力性 (cross-elasticity) という概念を独占理論に初めて持ち込んだのは、N.カルドアである。彼は、(〔22〕 P.33~41)の中で、多数の財の中に“cross-elasticity”の序列があり、売手数の増加によって、この交叉弾力性値が変らないか、又は、増大することを前提とすれば、グループ内の売手数の増加は独占力を弱めると、論じている。

力性値 (the value of cross-elasticity) との間に、格段のギャップがあるならば、依然として、部分均衡論は有効であるということである。交叉弾力性の値によって、商品が分類され、グループ(産業)が構成され、各々の市場構造が分類されるならば、部分均衡論の有効性は十分発揮され、チェンバリンの解明しようとした独占理論に、一層の光彩と発展が与えられるものと考え⁽¹¹⁾る。正しく、その方向にそった発展こそ、現実の価格メカニズムの解明への一歩前進ではないだろうか。生産物のグループが決まり、産業が構成され、その市場構造が決まれば、その上に立脚したモデル分析が可能となる。近代の経済理論の重要な有効性の一つに、その理論の持つ“operational aspect”が数えあげられるが、価格理論を現実に応用しようとするならば、産業の概念がその基本をなす。しかも、現実の産業の市場構造の多様性をかえりみると、その各々の特殊性を十分考慮せずして、いたずらに一般化への道を歩むことは、十分、注意されなければならないのではないだろうか。⁽¹²⁾

ii) 交叉弾力性による市場構造の分類

さて、ここで、交叉弾力性によって、市場(産業)概念を個別均衡概念に結びつけ、チェンバリン理論の部分均衡論に肉づけをしよう。

チェンバリンは、“groups of products”と云う概念の中で、暗々裡に、交叉弾力性の値によって“group”の分類を述べていたとしても、積極的に市場(産業)構造の分類へと進まなかった。

ところで、前節で私は独占理論の一般均衡論化には疑問があると述べたが、R・トリフィンの“Monopolistic Competition and General Equilibrium Theory”に関する限りは、市場構造の分類にとって、非常に重要な提言がな

(11) J. S. ベインは基本的にこの観点を買き、産業組織論へと発展させた。(Bain [22] P. 153.)

(12) 但し、チェンバリン自身は、産業と“group”の概念は互いに独立であると考えていた。特に、後者は特定の問題や研究に応じて変化しうるだけの柔軟性を持つ概念であると主張している。しかし、私は、命名はどちらでもよいと考えている。重要な点は、産業を買手の立場から分類しようとした点である。(Chamberlin, [7] の第4論文, P. 82.)

されていた。トリフィン⁽¹³⁾は、その中で、売手間の需要の交叉弾力性の値から、市場（産業）の構造上の位置を確定しようと試みていたからである。彼は次の様に述べている。「相互依存係数（coefficient of interdependence）——（これは cross-elasticity の事である。 $E_{ij} = -\frac{dq_i}{dp_j} \cdot \frac{P_j}{q_i}$; i, j は生産物の番号）——は、売手の市場状況の独占と競争の相対的な割合（share）の尺度である。というのも、それは、純粹競争の無限大から、独占の零までの範囲にあるからである」と。（Triffin [20] p.131）。そして、トリフィンは、この E_{ij} を用いて、市場を次の三つのカテゴリーに分ける。（Triffin [20] p.103~105.）

- (1) 純粹独占（pure monopoly） $E_{ij} = 0$
 (2) 異質的競争（heterogeneous competition） $E_{ij} = \text{有限値}$
 (3) 同質的競争（homogeneous competition） $E_{ij} = \infty$

さらに、上記の(2)及び(3)に関して、寡占の相互依存性の指標として、

$e_{ij} = \frac{dp_i}{dq_j} \cdot \frac{dq_j}{dp_i}$ を定義し、これによって、さらに小分類した。すなわち、

- (a) 非寡占的（non-oligopolistic） $e_{ij} = 0$
 (b) 寡占的（oligopolistic） $e_{ij} = \text{有限値である。}$

以上、 E_{ij} と e_{ij} の組合せにより、チェンバリンが分類した五つの市場を区分した。

その後、この交叉弾力性による市場区分をめぐって、一連の論争が“American Economic Review”の誌上をにぎわした。⁽¹⁴⁾ バインは、この論争を整理して、次の四つの命題にまとめた。（Bain [23] p.155~6.）

1. 市場の形式的な分類は、生産物の代替性の基準として価格交叉弾力性

(13) ()の中は私の注釈である。

(14) 例えば、R. L. Bishop, “Elasticities, Cross-elasticities, and Market Relationships,” A. E. R., XLII, 1952; R. Heiser, “Elasticities, Cross-elasticities, and Market Relationships,” A. E. R., XLV, 1955; W. Fellner, “Elasticities Cross-Elasticities, and Market Relationships” A. E. R., XLIII, 1953; E. H. Chamberlin, “Elasticities, Cross-elasticities, and Market Relationships,” A. E. R., XLIII, 1953, 等々である。

(price-cross-elasticity, $E_{ij} = -\frac{dq_i}{dp_j} \cdot \frac{p_j}{q_i}$) を、売手の数又は相互依存性 (interdependence) の基準として数量交叉弾力性 (quantity-cross-elasticity, $e_{ij} = -\frac{dp_i}{dq_j} \cdot \frac{q_j}{p_i}$) 又はある代替的な尺度を用い、この両者に関連づけることが必要である。

2. 市場の生産物の完全な代替性 (or, homogeneity of products) は、市場の中の生産物の数又は売手数にかかわらず

$$E_{ij} \rightarrow \infty$$

“対称的 (symmetrical)” な生産物の差別化がある場合⁽¹⁶⁾

$$E_{ij} = \text{有限値}$$

生産物が異なった市場、又は、産業、又は、グループにあるとき

$$E_{ij} \rightarrow 0$$

3. ある市場に多数の小規模の売手が存在する場合、生産物の差別化があるうがなかろうが

$$e_{ij} \rightarrow 0$$

売手のどれかの対に、寡占的相互依存性 (oligopolistic interdependence) があれば、

$$e_{ij} \rightarrow \text{有限値 (その特定の売手の対に対して)}$$

$$e_{ij} \rightarrow 0 \quad (\text{その他のすべての対に対して})$$

単純な寡占 (少数の売手が、各々、circular interdependence をもっている) であれば

$$e_{ij} \rightarrow \text{有限値 (すべての対に対して)}$$

(15) 例えば、ビショップは弾力性を偏微分で定義し、売手数を分類する指標に $(-E_{ii}/E_{ij})$ を用い、売手数が多数ならば $(-E_{ii}/E_{ij})$ は大、売手数が少数ならば $(-E_{ii}/E_{ij})$ は小、生産物の差別化の指標に $(-E_{ii})$ を用い、差別化しているならば $(-E_{ii}) < \infty$ 、差別していないならば $(-E_{ii}) \rightarrow \infty$ とし、両者の組合せで、市場分類を修正することを主張している。(Bishop [24] p. 799.)

(16) “対称的 (symmetrical)” という term が生産物の差別化された市場に与えられるとき、あらゆる生産物はそのグループ内の他のすべての生産物に対して同一の代替性をもつということの意味している。

4. 初歩的なチェンバリンタイプの市場構造は，“symmetry”の仮定の下では，交叉弾力性をつかって次の様に定義出来る。

“symmetry”の仮定の下での市場分類

市場の型	特定市場のメンバーの各々の対に対する交叉弾力性値 E_{ij} e_{ij}	
純粋競争	$\rightarrow \infty$	$\rightarrow 0$
独占的競争	有限値	$\rightarrow 0$
純粋寡占	$\rightarrow \infty$	有限値
異質寡占	有限値	有限値
純粋独占	あらゆる他の生産物に対して $E_{ij} \rightarrow 0$	

以上，バインがまとめたように，この弾力性概念 (E_{ij} , e_{ij}) を使って，初歩的なチェンバリンタイプの市場構造（産業構造）の分類が可能となる。しかも，この弾力性概念は，市場（産業）構造の分類に関する指標の explicit な数量化を可能にし，operational な含みを我々に期待させる。

しかしながら，無限に接近するとか，零に接近するかという数学上の概念を実証研究上の近似概念にどの様に調和させるかと云う問題は別としても，弾力性概念に内在する制約がこれ以上の前進をはばむ。すなわち，弾力性， $E_{ij} = \frac{dq_i}{dp_j} \cdot \frac{p_j}{q_i}$ ($i \neq j$) が， $n = 1, 2, \dots, n$ のすべての財の対に対して定義され，しかも，その数値の比較が意味を持ちうるためには，初期価格において， $p_1^0 = p_2^0 = \dots = p_n^0$ の諸関係が満たされなければならない (T. Thin [25] p. 29~37)。ところが，現実の差別化された市場において，これらの諸関係が満たされると想定することは困難である。そもそも市場（産業）の分類は差別化された市場をいかに分類するかという問題から出発したにもかかわらず，交叉弾力性概念を用いて市場構造を分類することは，その初期価格がすべての財に対して同一であると云う想定の下で分類するに等しい。これは全くの自己矛盾といえるかもしれない。

にもかかわらず、弾力性概念に意味を持たせようとするれば、ある程度先見的に同質性や原料又は生産プロセスの類似性によってグループを設定し、その境界線上にある財に対しては、価格が同一であると云う想定の下で、弾力性概念を近似的に適用し、その有意性をテストする以外に道はないだろう。全く同じことは e_{ij} に関してもいえるだろう。

実証研究のように、少々ラフでも operational な近似を求める場合ならば、上記の様なアプローチで十分であるが、やはり、理論的に、この様な分類には無理がある。むしろ、理論的には、ベインが、弾力性を用いて市場を質的に同一のものに還元するために、“symmetry”や“circular dependence”のシビアな仮定を導入していることから理解されるように、弾力性に意味があるのではなく、仮定そのものが売手間の競争上の地位を確定する基本的要素であるという点を認識することが重要である。従って、実証上の市場の分類は少々、幅のある概念でもよく、又、交叉弾力性による市場構造の分類は暗礁に乗りあげて、もとのきやに帰着したかもしれないが、この一連の論争と試みの中から、その産業の市場構造上の諸属性と位置づけを明確に認識し、売手間の競争の特質と運動形態を抽出することの重要性を認識することがより大切である。云うまでもなく、現実の寡占はその多様性と複雑性を一層深めている。我々が、この寡占問題に挑戦するとき、その分析のフレームを決めなければならないが、必ずや、チェンバリンの市場構造の分類を越えて、市場の細分類が必要となってくる。しかし、その細分類にあたって留意すべきことは、生産物の少数と異質性以外に附加された属性が、現実をより正確にとらえ、理論構成に一層の有効性を発揮せしめ、より正確な価格メカニズムの解明に役立つのか否かによってその属性の当否が決められなければならないということである。F. マッハループも次の様に主張している。

「最初に寡占のちがった型または種類を区別しなければ、“寡占の経済的[・]結果”または、“寡占の起因[・]”について、どの様な一般化もほとんどなしえ

ないだろう。換言すれば、寡占の分類が必要なのである」と。(Machlup [18] p.359.)

かくして、ベインは、そもそも寡占の条件である“少数”とは何であるかと云う問題提起をする。「売手の少数という概念は広すぎるし、ルーズな概念である」と主張する (Bain [23] p.159)。ベインは、チェンバリンに従い、純粋寡占と異質寡占を分け、さらに、その細分類の基準として、売手の集中に関するチェンバリンの基準であった“多数か少数か”の二分法を排除して、代りに、売手の集中度とまわりの競争的な小規模の売手の有無とに取り、その両者に従って、より詳細に市場形態を分類したのである。ここに、チェンバリン理論の一大飛躍である産業組織論の基礎構造がベインの手によって打ち立てられた。

iii) 参入（侵入）の条件

産業（市場）の均衡に関連して、チェンバリンが市場の分類に持ち込んだ第三の基準は、産業に対する参入（侵入）である。彼は次の様に述べている。

「高い平均利潤が全体の一般的領域に新しい競争者の侵入をみちびくとしても、いろいろの既存の生産者たちの諸市場は、同じ容易さでもって、もぎとられるわけではない。あるものはやむをえず地盤をゆずるが、しかしその利潤は、営業をつづけるに必要な最小額を下回るまで減少するわけではない。あるものは利潤を極小額まで切り下げられるかもしれない、あるものはまた脱落しなければならないかもしれない。けだし、生産物のその特殊のヴァリエーションに対する需要はごくわずかにしか存在しなかったり、これを創り出すことが出来なかったりするからである。しかし、あるものはまた、彼らの商品を好む強い偏愛に守られて、一般的領域への侵入によってほとんど影響を受けないでいるかもしれない。こういう場合、その独占利潤は競争の手のとどかぬところに位置している。」と。(Chamberlin [6] p.82.)

チェンバリンはここで非常に重要な問題を提起した。第一点は、参入の条

件によって独占利潤の確保に異なった影響を与えること、第二点は、この様な参入の条件は生産物の差別化(分化)という市場の構造的要素に原因を持ち、長期的性質を持つこと、以上の二点を明示的に提起した。その後、ペインは、チェンバリンの参入の条件をふまえ、次の三つの要因が参入の条件を形成することを明らかにした; (1) 既存企業の絶対的な費用利益 (absolute cost advantages of established firms), (2) 既存企業の生産物差別化の利益 (product differentiation advantages of established firms), (3) 有意義な大規模企業の経済 (significant economies of large-scale firms) (Bain [26] p.14~19)。そして、ペインは以上の三つの構造的側面から、参入に関する実証的分析を試みた。マッハループはもっと積極的に、参入をめぐるグループ均衡の問題を、より多数の売手、の競争と考え、個別企業の均衡の問題からはっきりと概念的に区別し、参入をめぐる競争を独立させ、詳細な理論分析をした (Machlup [18] p.102~111, 及び, Book IV, VI)。この参入をめぐる若干の理論的側面はIVでふれるであろう。

最後に、産業の定義に関して、チェンバリン理論が一生産物一企業の前提に立った部分均衡論であるが故に受けなければならない弱点、従って、その上に立脚した産業組織論のアプローチの弱点に関して、一点だけコメントをしておこう。

問題は、企業が相異なる複数の生産物を統一した経営組織体の下で生産している場合、即ち、多角経営や混合的生産に従事している場合に生じる。いうまでもなく、チェンバリンの需要サイドからの産業の定義によれば、各々の生産物があたかも別々の経営組織体にあるかのように分割されて、別々のグループ(産業)に所属する。しかしながら、ある同一産業内において単一生産物の売手と多角化された売手との間にいかなる政策(policy)の差があるのか? 極端なケースを考えよう。他の条件を一定として、多角化された企業によってのみ構成された産業と、単一生産物企業によってのみ構成された同一産業とに、果して、企業の行動に、市場の performance に違いが生じる

のだろうか、生じないのだろうか。生じないということではなければ、或いは、附加された多角化という属性がいかなる経済的帰結をもたらすかが明確にされなければ、この様な企業に対して、産業組織論的アプローチを是認するわけにはいかないだろう。産業の定義に関するこの問題は、チェンバレンのように買手側からみた定義では解決しない。必要なことは、供給側の諸条件、とりわけ生産プロセスや競争戦上の位置、手段、運動法則の分析である。この古くて新しい分析が今後とも一層進展することを期待する。

引用文献

- [1] R. L. Bishop, "The Impact on General Theory", *American Economic Review*, May, 1964.
- [2] ———, "Elasticities, Cross-elasticities, and, Market Relationships", *A. E. R.* Vol. XLII, 1952.
- [3] J. Robinson, *The Economics of Imperfect Competition*, Macmillan, 1965.
- [4] ———, "Imperfect Competition Revisited" *The Economic Journal*, Vol. 63. Sep., 1953.
- [5] E. H. Chamberlin, *The Theory of Monopolistic Competition*, 8th. ed. H. U. P., 1962. 青山秀夫訳『独占的競争の理論』引用文は主として訳文による。
- [6] ———, *Towards a More General Theory of Value*, Oxford University Press, 1957.
- [7] A. A. Berle, Jr. and G. C. Means, *The Modern Corporation and Private Property*, Macmillan, 1932, 北島忠男訳『近代株式会社と私有財産』。
- [8] A. Marshall, *Principles of Economics*, 8th ed., Macmillan, 1930; 馬場啓之助訳『経済学原理』（東洋経済）。
- [9] T. Thin, *Theory of Markets*, H. U. P., 1960.
- [10] A. Cournot, *Recherches sur les Principes Mathématiques de la Théorie des Richesses*, Paris, 1838; English translation, *Researches into the Mathematical Principles of the Theory of Wealth*, by N. T. Bacon,

- New York, 1960; 中山訳『富の理論の数学的原理に関する研究』(岩波文庫), 絶版。
- [11] F. Y. Edgeworth, “La Teoria Pura del Monopolio”, *Giornale degli Economisti*, vol.13, 1897; “The Pure Theory of Monopoly”, translated in, *Papers Relating to Palitical Economy*, Vol. I, 1925.
- [12] W. J. Baumol, “Monopolistic Competition and Welfare Economics”, *A. E. R.* Vol. LIX May, 1964.
- [13] P. Sraffa, “The Laws of Returns Under Competitive Conditions”, *The Economic journal*, Vol. 36, 1926; Reprinted in *Readings in Price Theory*, selected by a Committee of the American Economic Association.
- [14] H. Hotelling, “Stability in Competition,” *E. J.*, Vol. 39, 1929.
- [15] F. Zeuthen., *Problems of Monopoly and Economic Welfare*, 1930.
- [16] C. Kaysen, “Industrial Concentration in the United States”, in *Die Konzentration in der Wirtschaft*, herausgegeben von Helmut Arndt.
- [17] F. Machlup, *The Economics of Sellers' Competition*, 1952, 福田監修 服部訳『売手競争の経済学』(千倉書房)。
- [18] M. Friedman, “More on Arcibald versus Chicago”, *Review of Economic Studies*, Vol. X X X, 1961.
- [19] R. Triffin, *Monopolistic Competition and General Equilibrium Theory*, H. U. P., 1962.
- [20] J. R. Hicks, *Value and Capital*, 2nd ed. 1946; 安井・熊谷訳『価値と資本』(岩波書店)。
- [21] N. Kaldor, “Market Imperfection and Excess Capacity,” *Econometrica*, vol. II, 1935; Reprinted in, *Readings in Price Theory*, 1964.
- [22] J.S. Bain, “Impact on Microeconomic Theory,” in, *Monopolistic Competition Theory; Studies in impact*, edited by R. Kuenne.
- [23] ———, “The Impacts on Industrial Organization”, *A. E. R.* Vol. LIV, May, 1964.
- [24] ———, *Barriers to New Competition*, H. U. P., 1965.
- [25] 青山秀夫『独占の経済理論』昭和23年, (日本評論社)。